



ある集い ■ K.F.M.

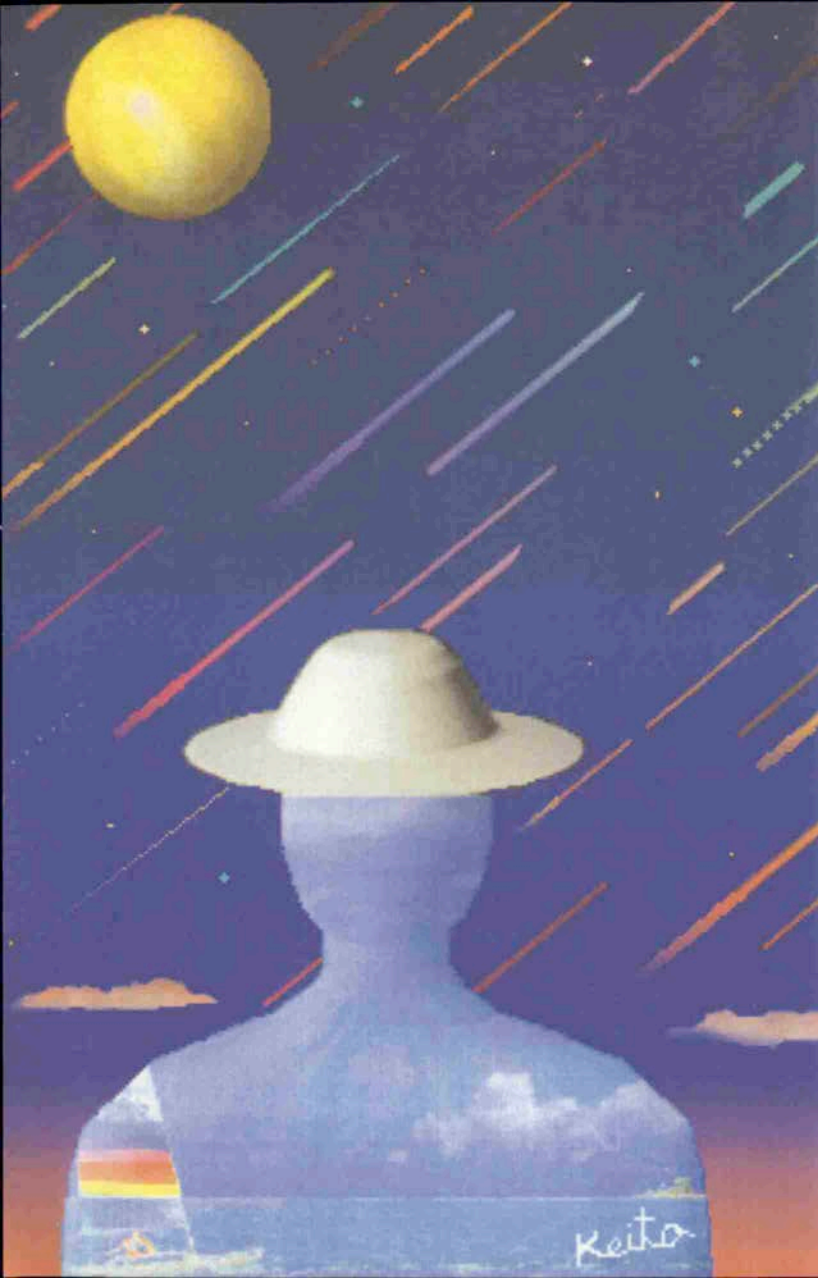
「7 MODELISTE 花衣裳」

KFM会長 藤本ハルミ

コウベファッションモデルリストKFMは、一九八〇年に結成され、その翌年神戸の未来をかけて開かれたポートピア'81にむけて「ポートピア'81へのプレリウド」をテーマにオリエンタルホテルに於て第一回のファッションショーを開きました。

それより十七年、その年その年のテーマを選び作品の発表を続けてまいりましたが、昨年十五周年記念のショーを目前にして一月十七日の大地震に出会い残念な中止ということになりました。会員はニットデザイナーの市野木悦子さん前川富紀子さん、三越のデザイナーの長井弘子さん、ブティック魔女の丹野最世子さん、クチュリエールの大西節子さんに私、藤本ハルミ、デザイナー六名にプランナーの月刊神戸っ子の小泉美喜子さんと妹尾光子先生、それに新しくブルーメール賞受賞者である、アートフラワーの佐藤悦枝さんが加わり文字通り花を添えてくれることとなりました。九月二十日（金）ポートピアホテルに於て「7 MODELISTE 花衣裳」をテーマに発表いたします。どうぞ、ご期待下さいませ。

■連絡先 KFM事務局 神戸市中央区山本通2-12-17クチュールマーガレット内
藤本ハルミ 電話078-24215690



これは神戸を愛する人々の雑誌です
あなたのくらしに楽しい夢をおくる
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ
これは神戸っ子の心の手帖です

9月号目次 ●1996-424

表紙／「静物（ざくろ）」小磯良平（兵庫県立近代美術館蔵）

セカンドカバー／女のいる風景 石阪春生

目次CG／高澤圭多

- 11 神戸っ子`96／ミカエル・ラウドルupp 内橋和久 高砂京子
- 15 K O B E 創生スナップ
- 16 ある集い／KFM
- 25 ポエム・ド・コウベ／「三宮」佐土原夏江 絵＝石阪春生
- 27 私の意見／「東部臨海部が逞しく甦る」長井成雄
- 28 連載エッセイ／静暇流浪日記⑥「テキーラの舌の味」
村松友視 絵＝瀧本唯人
- 30 浅井信雄対談シリーズ
「復興へ、報道の使命をかける」ゲスト＝佐藤公彦
- 36 地域文化論／「寅さん映画の次をどう思う？」嶋田勝次
- 40 ブライダル対談／「神戸はいま、震災結婚と震災ベビーブーム」
小山乃里子 桂あやめ
- 48 もうさんのひょうごワーク／「福祉のまちづくり条例改正」
- 50 創り出そう新しい神戸／「ひょうごグリーンネットワーク」
- 52 トアロードまちづくり／「領事館」奥宏明
- 54 K O B E まちづくり／「どないすんねん新聞地」
- 55 神戸電脳事情／「高橋孟のパソコン日記」
- 56 対談／「タカラヅカとリサイタル」麻美れい 広渡鮎
- 70 亀井一成のズームインズO O／「足らなかった西瓜」
- 76 神戸を福祉の街に／「まつりと福祉」橋本明
- 78 有馬歳時記／女将訪問「奥の坊・先山万紀子さん」
- 80 シネマ試写室／「ナッティー・プロフェッサー」淀川長治
- 82 もだかる／「ウォーホル展」「スワロウテイル」「ケープルガイ」etc.
- 84 神戸百店会だより
- 86 びっと・いん
- 88 ポケットジャーナル
- 92 るばえっせい／神戸の文化財はいま⑨「風が街を形づかった」
- 96 連載小説／「ガラスの原」最終回 木村光理 絵＝森澤達夫
- 102 神戸っ子倶楽部
- 114 海 船 港／「舟で防波堤に渡る」
- 116 北野マップ／「J A Z Z ストリートを前にして」
- 118 福井恵子のほのぼのフラッグアート／「平成の遣唐使」

カメラ／米田定蔵・池田年夫・松原卓也・森田篤志・森田純三・米田英男

オーエムエムジーが語る 現代の結婚事情あれこれ

誠実の行方

●誠実ってなんだろう

適齢期の男性、女性に、結婚相手に望む条件のアンケートを取ると、必ず「性格」がトップに挙げられます。これは男女問わず、絶対的な条件です。

では、具体的には…と聞くと、上位にくるのは「誠実な人」。実際オーエムエムジーが会員に行った意識調査でも、結婚相手を選ぶ際の重視ポイントに、男性では3位、女性では1位にこの「誠実」が挙がっているのです。

それでは、いったい「誠実」とはなんでしょうか。

●誠実の裏側に見えるもの

「誠実」をキーワードに、現在の



恋愛と結婚を掘り下げていくと興味深い発見ができます。それは「恋愛・結婚の自由化」が急速に進んでいるということです。

いま恋愛と結婚は、いくつかの特徴で語ることができないほど、多様化しています。つまり、個人個人の事情や考えのもとに、自分の気持ちに正直な恋愛や結婚をする時代になってきたのです。

こうした流れのなかで今後「結婚」という形式、制度もさまざまに変容していくと考えられます。しかも社会体裁よりも、気持ちの面での「お互いの愛情の深さを計る目安」という意味合いがさらに強まっていくような気がしてなりません。

結婚は「しなくてはいけない」から「したい相手と出会ったときにする」ものになっています。だからこそ「誠実」という物差しが、人間関

係のよりどころとして必要になってくるのでしょうか。

●一緒に生きていく人を

信頼したいから誠実を重視する

ふだん相手が誠実かどうかを先に考えて、人付き合いをする人はいないと思います。これは「誠実」という言葉が無意識に信頼し合える関係を示すものだからです。

恋愛に限って言えば、交流があり、お互いを認め合い、結婚ということになります。その時点ですでにお互いを「誠実な人」と了解しているということ。そして結婚後も継続してその信頼関係を積み重ねていくことに結婚の意味があるのではないのでしょうか。

時代によって価値観がどう変わってもこのことは永遠に続いていくと、オーエムエムジーでは考えています。

(資料提供 (株)オーエムエムジー)

結婚情報
ommg

株式会社 オーエムエムジー
神戸支社

〒650 神戸市中央区北長狭通2-5-9
グランドプラザターア6F
TEL. 078-391-2701 (代)
FAX. 078-391-2730

美しい花嫁になられた
生田神社前宮司福田様
のお孫さま
いついつまでも
お幸せに…

(株)美容室エリザベス住吉店▼



HAIR & FACE *Elizabeth*

本 店 神戸市中央区三宮町 2 丁目6-4
TEL. (078) 331-8894 (代)
住吉店 神戸市東灘区住吉本町 2 丁目10-42
TEL. (078) 851-6388 (代)
レンタルブティック 三宮店美容室エリザベス階上
TEL. (078) 331-3258
Ellie



'96 KOBE 愛の季節

光と風と自然を感じて
愛のフルーツ・フラワーウェディング



KOBE Municipal

Fruit & Flower Park

神戸市立フルーツ・フラワーパーク

〒651-15
神戸市北区大沢町上大沢字西谷2150
TEL. (078) 954-1000

【オーキッド フラン】

60名 ¥2,300,000

適用日：全 日

- 料理 ●飲物 ●挙式 ●控室 ●会場
- ケーキ ●装花 ●花束 ●サンクスフラワー
- 司会 ●音響 ●照明 ●カラオケ ●ビデオ
- 寄せ書き ●芳名録 ●記念写真 ●印刷物
- 引出物 ●衣裳 ●美容 ●着付 ●かつら ●かんざし
- 挙式証明書 ●チャーターオルガン ●聖歌隊
- 介添料 ●チューチュートレイン ●税 ●サ

【ヒーチ フラン】

40名 ¥1,000,000

適用日：平日・仏滅の土日

- 料理 ●飲物 ●挙式 ●控室 ●会場
- ケーキ ●装花 ●花束 ●サンクスフラワー
- 司会 ●音響 ●照明 ●カラオケ ●ビデオ
- 寄せ書き ●芳名録 ●記念写真 ●印刷物
- 引出物 ●衣裳 ●美容 ●着付 ●かつら ●かんざし
- 挙式証明書 ●チャーターオルガン ●聖歌隊
- 介添料 ●チューチュートレイン ●税 ●サ

【パーティー フラン】

40名 ¥800,000

適用日：平日・仏滅の土日

- 料理 ●飲物 ●挙式 ●控室 ●会場
- ケーキ ●装花 ●花束 ●サンクスフラワー
- 司会 ●音響 ●照明 ●カラオケ ●ビデオ
- 寄せ書き ●芳名録 ●記念写真 ●印刷物
- 引出物 ●衣裳 ●美容 ●着付 ●かつら ●かんざし
- 挙式証明書 ●チャーターオルガン ●聖歌隊
- 介添料 ●チューチュートレイン ●税 ●サ

【ハーベキュー フラン】

40名 ¥600,000

適用日：全 日

- 料理 ●飲物 ●挙式 ●控室 ●会場
- ケーキ ●装花 ●花束 ●サンクスフラワー
- 司会 ●音響 ●照明 ●カラオケ ●ビデオ
- 寄せ書き ●芳名録 ●記念写真 ●印刷物
- 引出物 ●衣裳 ●美容 ●着付 ●かつら ●かんざし
- 挙式証明書 ●チャーターオルガン ●聖歌隊
- 介添料 ●チューチュートレイン ●税 ●サ

【フロリー&ハリー フラン】

小人数 ¥300,000

適用日：平 日

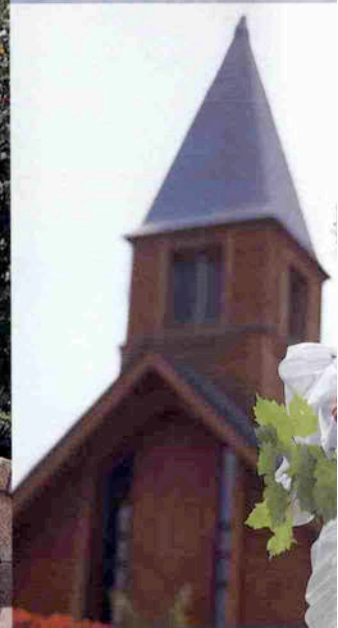
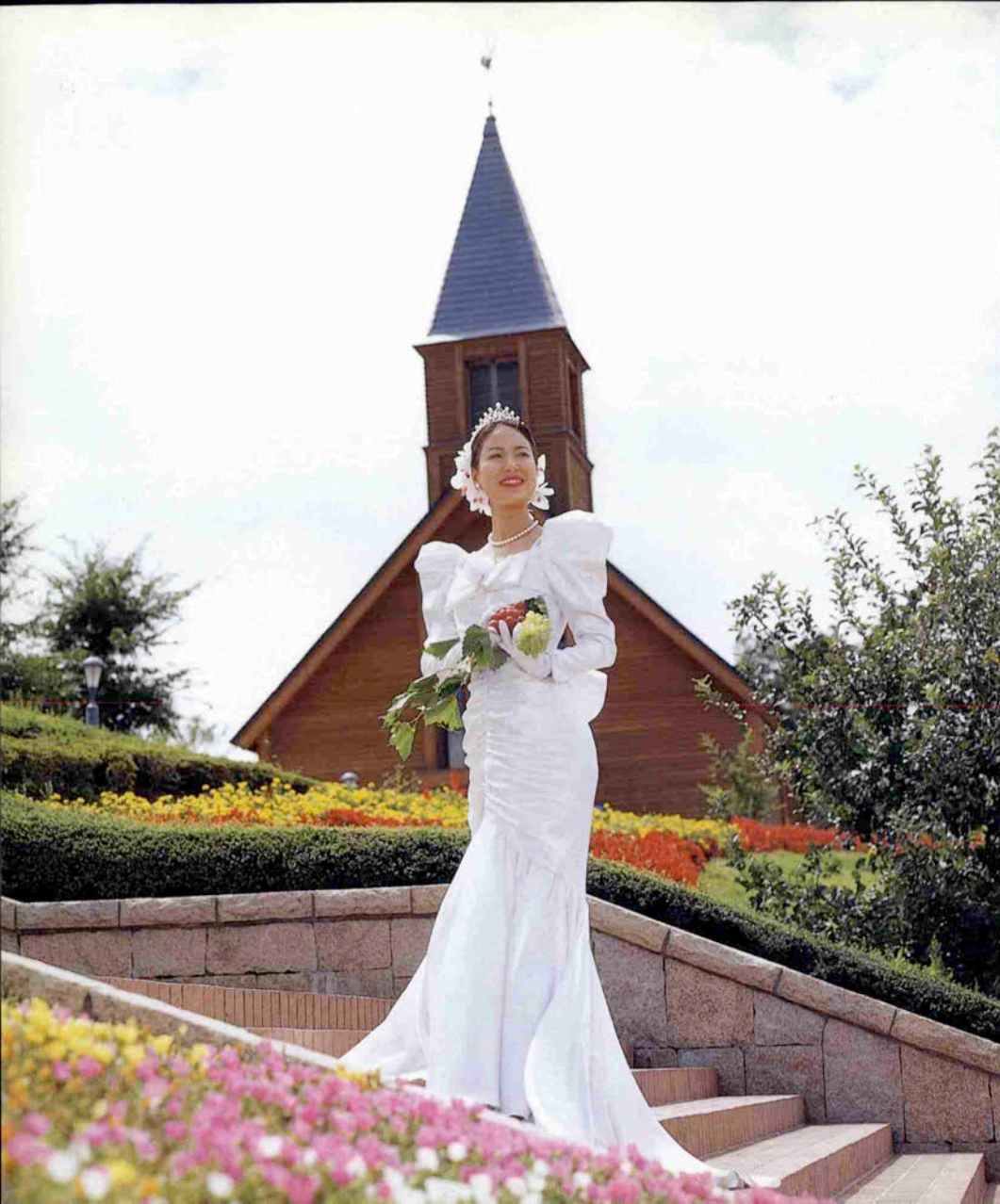
- 料理 ●飲物 ●挙式 ●控室 ●会場
- ケーキ ●装花 ●花束 ●サンクスフラワー
- 司会 ●音響 ●照明 ●カラオケ ●ビデオ
- 寄せ書き ●芳名録 ●記念写真 ●印刷物
- 引出物 ●衣裳 ●美容 ●着付 ●かつら ●かんざし
- 挙式証明書 ●チャーターオルガン ●聖歌隊
- 介添料 ●チューチュートレイン ●税 ●サ

※含まれるもの(●印)

衣裳／神戸京屋 ヘアメイク／みはら美容室 真珠／木下真珠

撮影場所／フルーツ・フラワーパーク内 ホテル研修館前・音楽堂前・エントランス広場前

モデル／藤本幸子('96ひょうご観光プリンセス)





KOBE EXCELLENT FASHION

欧風館

“今秋「リチャード・ジェームス」登場”

欧風館は21世紀を望む新しい一流テラー像を掲げて1995年1月にオープンしました。

英国製最高級紳士服地「フィンテックス」を中心に使用、“クラシック&トラディショナル”を主流とした正統派ロイヤル・ブリティッシュ・テイストの「ロイヤル・プレミアム・オーダー」など、経験40年という名人級の技術者による手縫い仕立ての超高級お誂え紳士服のコーナーをはじめ、イタリアン・テイストのトップファッションをセールスポイントに“エレガンス&ファッショナブル”をテーマとして追求した「クリツィア」（ミラノ），“クラシック&エレガンス”をコンセプトとするヨーロッパ・テイストの「ジバンシイ」（パリ）両服地によるヌーベル・クチュール（中仮縫付きの新しいオーダーメイド）を提案しています。さらに'96秋・冬物より、“サビルローの新しい風”とうたわれている新進気鋭のデザイナー、色の魔術師リチャード・ジェームス（ロンドン）による“クラシック&ファッショナブル”をベースにデザインされたオリジナルの紳士服が日本に初めて上陸し大きな反響を呼んでいます。



欧風館

〒100 東京都千代田区幸町1-1-1
帝国ホテル本館アーケード内
☎ 03-3503-7973 店長 竹中陽一郎

KOBE EXCELLENT SHOP

★神戸唯一のボルボネーゼ・タルブティック



神戸市中央区元町通3丁目1-12 ☎391-0014

★伝わる真ごころ最高の風格

（金）柴田音吉洋服店

神戸市中央区元町通3丁目1-17 ☎334-2250

★よろず御機衣縫上處

神戸シヤリ

神戸市中央区三宮町3丁目1-6 ☎331-2168

★選りすぐった一点を…

Sanohe

神戸市中央区元町通2丁目5-7 ☎331-4707



LIZA

神戸市中央区三宮町2丁目6-1 ☎391-6806

★婦人帽子

maxim
マ★シム

神戸市中央区北長狭通2丁目6-13 ☎331-6711
(トアロード)
全国有名百貨店婦人帽子売場

※このシリーズは上記の専門店の提供によるものです。



R・ジェームスによるオリジナル紳士服

元町 弥生美容院

神戸市中央区元町通5丁目4番15号 078-341-1256
メリケンパークオリエンタルホテル店 078-322-0722
西神オリエンタルホテル店 078-992-3009
新神戸オリエンタルホテル店 078-291-1166
ホテルゴーフリッツ店 078-303-0312



'96 KOBE 愛の季節

神戸っ子の

母子三代にわたる花嫁を

母子三代で創り続けています

衣裳／つるや衣裳店

撮影場所／

新神戸オリエンタルホテル

モデル／上原三葉

三宮

佐土原夏江

絵／石阪 春生

ビルが消えて空が大きくなった

こんなにも光がそそいで

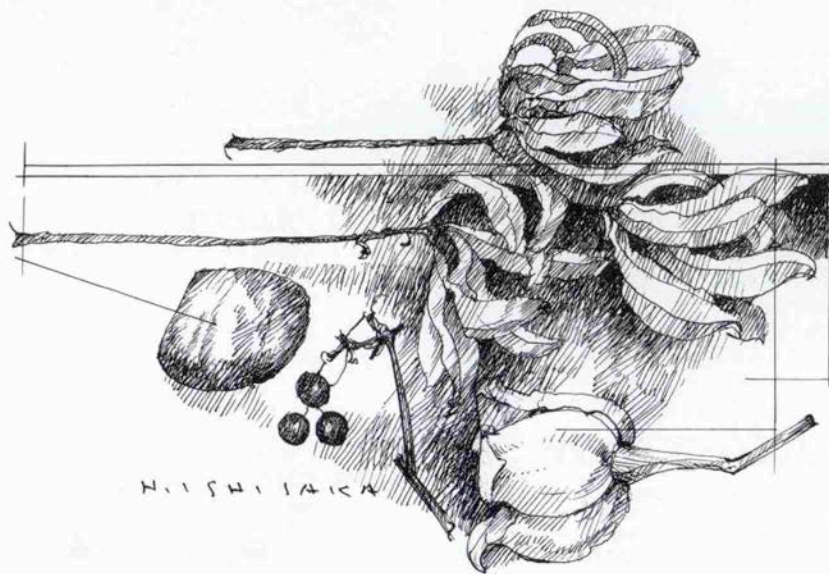
風の通う街だとは知らなかった

神戸の海はすぐそこにあったんだ

見えなかったものが

ひょっこり

姿を現わした



石阪 春生

Dairake

ペアケーキ

お喜びを伝えるお二人のシルエット
ペアスタイルの贈りもの



- Aセット クラウンケーキ&バウムクーヘン
- Bセット クラウンケーキ&クッキー
- Cセット クラウンケーキ&アーモンドケーキ
- Dセット バウムクーヘン&クッキー
- Eセット バウムクーヘン&アーモンドケーキ
- Fセット クッキー&アーモンドケーキ



株式
会社

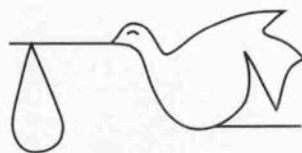
北 欧 の 銘 菓
2-ハイム・コンフェクト

本 社

〒651-21 神戸市西区北別府2-1-2
TEL 078-974-9756 FAX 078-974-9758

プライダルギフト
事業部・大阪

〒558 大阪市住吉区荻田町7丁目12-19
TEL 06-697-9435 FAX 06-697-4188



SAMOTO CLINIC

佐本
産科

ママといっしょに



赤ちゃん：遠山由梨香ちゃん（平成8年3月22日生まれ）

パパ：芳樹さん ママ：久美さん

「わがままでもお転婆でもいいから、光り輝く女の子になってね」

★佐本産科・婦人科★

佐本 学

神戸市兵庫区中道通4-1-15

TEL:078-575-1024 (病室TEL:078-577-7034)

市バス上沢4停南スグ

●駐車場完備●

□私の意見

一〇〇年の歳月を経て

震災を経て

今、東部臨海部が逞しく甦る

長井 成雄

株式会社神戸製鋼所 総合地域開発本部
開発計画部臨海岩屋計画室 室長



あの悪夢のような大震災から1年半が過ぎたが、今、思い起こしても「まさか、なんでやねん」としか言いようのないほどの強烈な出来事であった。

私は、長田区の刈藻島の運河で産湯をつかり長田神社にお宮参りし、兵庫区、須磨区と移り住んで、地元で働くなら神戸製鋼と親に言われ、すでに半世紀も神戸で過ごしている「神戸っ子」である。特に私が生まれ育った思い出深い下町に相当な被害が集中したことは大変残念なことではあるが、それぞれの地域の特徴を生かし活力あふれる町として逞しく復興して頂きたいと思う。

一方、私の働いている職場は中央区、灘区の臨海部に点在しているが、神戸製鉄所が大打撃を受けるなど、その被災額が気の遠くなるような1000億円を越す額に上った。特に、我々神鋼マンにとつて誇り高きシンボルであった「高炉の灯」が消えたことは大変なショックであったし、会社にとつても神戸に踏み止まるかどうかの決断をしなければならない未曾有のピンチであったように思う。懸命の復旧によつて、震災後70日目には感動的な「高炉への再火入れ」を果たしたが、震災後いち早く灯した高炉の火が21世紀を照らす道標となるように地元企業として精一杯頑張っている。

また、震災復興のリーディングプロジェクトとして期待されている東部新都心計画は、当社の脇浜・岩屋工場跡地を中心に、居住機能、業務・研究機能、文化・交流機能を備えた「多機能複合型」の新都心の形成をめざしており、21世紀に向けた壮大な街づくり計画が動き始めている。この地区は当社発祥の地として90年の長きにわたり先輩達が汗し、涙し、守り続けてきた貴重な経営資源であるとともに、新生こうべの都市づくりにおいても貴重な都市資源であることから、現在、官民一体となつて全力で取り組んでいる。

当社誕生以来、生産活動の用に供してきた土地が、今、一〇〇年の歳月を経て、震災を乗り越えて「発見と驚きと感動を与える新たな街」に甦ろうとしている。

醉眼流旅日記

第6回

テキーラの苦い味

村松 友視 〈作家〉

カット／灘本唯人
題字／筆者

外国への旅でめずらしい酒を味わい、いたく感動することもあるのだが、めずらしすぎてショックを受けるような酒もある。私は、めずらし物好きに属するようなところがあり、日本ではめったにお目にかかれないなどと言われると、これは触れておかなばならぬと思ってしまうタイプだ。

かつて、「音楽の旅はるか」という番組で、メキシコへと旅をしたことがあった。この番組の中の私の目的は、「泣き女」というメキシコの曲をさまざまなスタイルの演奏や歌で聴くということと、「ソン・ハローチョ」すなわち「ベラクルスの歌」を聴くということだった。メキシコも南のオアハカあたりとベラクルスという港町が取材で訪れるべき場所だった。

私は学生時代に「ベラクルス」という映画を見た。これは、ゲリー・クーバーとバート・ランカスターが役の上でも演技の上でも火花を散らす痛快な映画だったが、西部劇なのに舞台がベラクルスという港町だった。マローン・ブランド主演の「片目のジャック」も港町が舞台だったが、西部劇と港町の組合せはあまりなかったはずだ。「ベラクルス」は、バート・ランカスターが自らプロデュースし主演した作品で、大物スターのゲリー・クーバーを善玉

の主役として丁寧に招き、自らは悪役に回りながら、けつきよくは主役のクーバーを喰ってしまったという因縁つきの映画だった。それもあって、私はベラクルスという港町には大いに興味があつた。

そのベラクルスには、かつてスクリーンで見たのと同じ風景があつた。クーバーとランカスターの虚々実々の駆け引きを頭にうかべながら、私は「ソン・ハローチョ」とベラクルス産の赤ワインを楽しんだものだった。

さて問題はオアハカだった。オアハカには名物のメスカルというテキーラがある。このメスカルはやや黄金色をおびているのだが、これには理由があつた。大体、テキーラの原料は龍舌蘭だ。その昔、太陽にじりじりと照らされ、ただれたように溶けた龍舌蘭の葉を、犬がペロペロと舐めていたのを見た人が、やけに旨そうに舐めているなと思ったのが、テキーラ誕生のきっかけだった。犬がペロペロと舐めるのを見てやけに旨そうだと思った……その人が呑ん兵衛であることはあきらかで、テキーラは酒好きによってつくられた酒であることもこのエピソードは証明している。

ま、テキーラはそうやって誕生したのだが、南部でテキーラをつくっているとき、そのテキーラの中



へ龍舌蘭の葉を喰っていたグサーノと呼ばれる青虫みたいなものが落っこちた。グサーノは即死してしまったのだろうが、そのエキスがテキーラの中に滲み出て、やや黄金色をおびてきた。ひと口飲んでみると、ちよつと変った風味のあるテキーラに仕立あがっていた。それが、オアハカ名物メスカル誕生ものがたりだ。

つまり、メスカルはオアハカの名物なのだから、当然、私はそれを現地で飲みたいと思った。しかも、メスカルをつくっている家へ行って飲ませてもらうというのだから、これは得がたい体験だといろこびいさんだ。

グラスを持っていると、その家のオヤジが何かをつまんで私に向けてさし出した。それはグサーノが干からびたやつだった。それを少し噛んではメスカルを口へ運ぶと、こたえられないアンサンブルを生むのだとオヤジは言った。

私は、右手にグラスを持ち左手にグサーノをつまんでカメラへ目を向けた。そして、カメラのうしろにいるプロデューサーに向つて、

「グサーノって、日本語に訳すと何になるのかなあ」

と言った。すると、プロデューサーは申し訳なさそうな顔をつくつて答えた。

「すみません、ウジ虫という意味だそうです…」

私は、両手を宙にかかげ、カメラを見すえたまま硬直してしまつたのでありました。

へむらまつ・ともみ 一九四〇年東京生まれ。慶応義塾大学文学部卒。六三年中央公論社に入社。「小説中央公論」「婦人公論」「海」編集部員を経て、八一年退社。八二年「時代屋の女房」で直木賞受賞。主な著書は「私、プロレスの味方です」「百合子さんは何色」「アブサン物語」「流水まで」など。





■ 浅井信雄対談シリーズ〈25〉

復興へ、報道の使命をかける

〈ゲスト〉

佐藤 公彦

〈神戸新聞社編集局長〉

浅井 信雄

〈神戸市外国語大学教授〉

浅井 名刺に新社屋の写真がありますが、新しい建物に移って張り切っておられるでしょう。

佐藤 三宮の新聞会館が大震災で壊れ、転々と仮住まいを続けてきたので、ほっとしています。

浅井 住み心地、働き心地はどうですか。

佐藤 眺めがいいですね。山も港もまちも広く見えます。

浅井 ハーパーランドの新社屋に編集局や広告局を置き、印刷、発送の業務は西区の工場で行うようになっていますが、拠点を二つに分けた理由は何ですか。

〔あさい・のぶお〕1935年新潟県生まれ。東京外大卒。読売新聞ワシントン支局長など海外勤務十年以上。米国ジョージタウン大客員研究員、三菱総合研究所客員研究員などを経て87年から現職。著書「アメリカ50州を読む地図」「民族世界地図」ほか。横浜市在住。

佐藤 分割は八年前からやっていることです。新聞は、以前は列車で販売店に運んでいました。駅のそばに輪転機を置く必要があったのです。いまは自動車輸送なので、印刷する場所は必ずしも市街地でなくてもかまいません。むしろ郊外の道路交通の便がいいところが経済的です。鉛活字を使っていたころは、編集局と印刷局の間を紙型や鉛版を持って走り回っていましたが、いまはコンピュータで紙面を作っていますから、離れていても問題はありません。

浅井 あの一十七日の夕刊も休まず発行したことは新聞界の語り草になっていますが、京都新聞社と結んでいた災害時の協力協定が大きく役立ちました。あの協定を結ぼうという発想はどこから生まれたのですか。

佐藤 新聞製作にコンピュータを導入したのが京都新聞社とほぼ同じ時期で、その更新時期を同じように迎えていました。京都新聞社の方から「コンピュータにはトラブルが付き物だから、いざというとき、互いに助け合おう」という提案があったのです。それから一年半かけて協定にたどりついたのです。

浅井 地震を想定していたのではなかった…。

佐藤 コンピュータのダウンに備えて、というのではどうも新聞社らしくない、地震、台風、津波に備えてと言った方が緊迫感がある、と、そんなことで災害対策協定という名前になったのです。

★地方版削減はつらかった

浅井 神戸新聞は二十年ほど前に「阪神間に直下型地震

の可能性がある」という記事を掲載していたそうです。ただ「二十年後に来る」とは書いてなかった（笑い）。その記事は覚えていましたか。

佐藤 全く忘れていました（笑い）。外部の方から「貴重な警告をしていたのだよ」と教えられました。三年前にも社会面トップに書いたり、企画もので関西は直下型の地震の恐れがあると連載したりしていたのですが、わたしたち自身が地震に備えることはありませんでした。昨年の地震直前にも朝刊のコラム「正平調」で「地震は忘れたころに来る。ことしがナマズ年にならないように気をつけよう」と書いてもいたのですが…。

浅井 それを読んだ人が、今年は十分気を付けようとか備えたという話はありませんでしたか。

佐藤 残念ながら、だれかが防災対策をしたという話は聞きません。わたしも何もしなかったのです。

浅井 昨年九月に毎日放送の斎藤守慶社長と対談したとき、毎日放送は一年前から地震対策を立てていて、これが役立ったと話しておられました。そういう準備をしていた企業もあるのです。神戸で事前に対策を立てていた



（さとう・きみひこ）1941年北海道生まれ。64年中央大学法学部卒。神戸新聞社入社。デイリースポーツ東京本社整理部に配属された後、神戸新聞社整理部、姫路支社佐用支局などを経て91年に整理部長、93年編集局次長、96年3月から編集局長。神戸市灘区在住。



浅井信雄さん

ところはありましたか。

佐藤 かなり綿密に取材をして探したのですが、見つかりませんでした。逆に、東京から神戸に転勤して来た人たちは「地震のおそれのない神戸に来てほっとした」という話ばかり…。

浅井 佐藤さんは地震の当時は編集局次長で、今年三月から編集局長になりました。震災報道についてさまざまな議論がありますが、よかった点、こうしておけばよかったのに、という点はどんなことがあるのでしょうか。

佐藤 できなかったことかというと、直後の新聞は、京都新聞で夕刊一〇ページ、朝刊二十四ページを作ったのですが、このうち神戸新聞の記者が整理をして作ったのはわずか四ページ。家庭面、運動面など残りは京都新聞の紙面を流用する形で出しました。地方紙として特色のある地方版が早版から最終版まで全体で十九面あるのですが、これが全く作れなかったのがとても残念でした。ことに、但馬や丹波、播磨など、被災はしなかったけれども懸命に支援してくれた人たちの動きをそれぞれの地方に伝えられなかったことは心残りです。

浅井 震災直後、暴動もなく略奪もなかったということになっていますが、うわさでは泥棒などいろいろあったと聞きますが、そうした記事はほとんど見当たりませんでした。意図的に掲載しない方針だったのですか。

佐藤 そうした事件を書くという方針はありませんで

した。確かにうわさはたくさんあって、取材したけれど事実が出て来ない。警察への被害届も出ていないし、現場に行っても確認できない。うわさだけが広がっているケースが多かったようです。

浅井 ああ混乱の時期ですから警察の機能も低下していたし、確認も難しい状況だったと思います。女性に対する暴行事件もたくさんあったといううわさも流れていましたが、事実はどうだったのでしょうか。

佐藤 そのことについてはいろんなところから新聞社に問い合わせがあり、わたしたちも広い方面で取材しましたが、確認はできませんでした。おぼろげながら浮かんできたのは、ある女性問題電話相談に被害を訴える三十数件の電話があったという話をつかんだのですが、ほかの電話相談にはそうした訴えはほとんど来っていない。公的な機関にもそうした訴えは少ない。ですから、三十数件の電話相談があったという話も信じがたい部分があると判断してストレートな記事にはしませんでした。

★二年間は震災報道に重点を置く

浅井 地震に対する認識には県内でも差があるようです。神戸市内でも六甲の山を越えると別世界、という状況でしたから、広い兵庫県内では震災についての考えに違いが出て来ているでしょう。新聞社にはどんな意見が来っていますか。

佐藤 最初の三カ月くらいは新聞社に寄せられる声もまとまっていたのですが、四カ月目くらいからは、被害がなかった地方からは「震災ばかり書いてるが、いいかげんにしてほしい」という声が出てきました。

浅井 そうした声にはどう対応をされたのですか。

佐藤 編集局としては、少なくとも二年間はあえて震災報道を重点的に続けようという方針を立てています。これは、雲仙・島原の噴火災害、奥尻の津波災害の報道に



佐藤公彦さん

ついてもいえるのですが、わたしたちはこれまで一過性の報道しかしてこなかったという反省があります。今度の震災での最大の教訓は、災害を他人事としてとらえてはいけない、すくなくとも兵庫県民全体のこととして考えようという姿勢を学んだことです。

浅井 兵庫県だけではなく全国でも考えてほしいのですが、現実には、温度差といわれるように震災への対応にずいぶん差ができています。

佐藤 神戸市内でも温度差ははつきりあるのですが、神戸新聞が震災を片隅に追いやらない姿勢を貫くことで、温度差をなくすよう身をもって示していきたいと思っています。

浅井 今でも覚えています。震災から半年たったころ、六甲の北側のレストランで食事していると、隣の席で「きょう三宮に行ってきたが神戸はまだ大変だよ」と話しているのです。自分も神戸にいます。同じ神戸市民でもこれ程の差があるのですから、中央と神戸とは認識に大きな差があるのは止む得ないと言えるのかも知れませんが、どうも日本人は人の不幸を他人事としか考えない風潮が強くなります。O-157の問題でも、岡山で発生が報じられても、例えば堺市では何の対応も取らなかった。

佐藤 実はそれは神戸新聞でも同じであって、これまでの各地の災害について一過性の報道はしても、それを教

訓に何かしたかというともない。半年後、一年後どうなっていたかという報道をきっちりやっていたら、阪神大震災に対してももう少し何とかできたのではないかと、いう反省があります。

★地震保険の実現に向けて

浅井 いまの復興の状況は、完全復興を一〇とするとどのくらいになっているのでしょうか。

佐藤 道路、港などインフラは七割から八割は復興しているが、生活の面では五割もいっていないでしょう。ひとつ気になるのは、公費で資産を援助しないと言いがら、個人資産の処理を公費で援助したがい処理が外見的にマイナスになっていると思います。壊れた家をすばやく解体処理してしまったものだから、全国から来た新聞関係者たちも「すっきりきれいになりましたね」と感想を言う。復興しているのだと錯覚してしまうのです。仮設住宅も、人工島や六甲山の北側に建てたものだから、ちょこっと神戸にきた人の目には入らない。「神戸は早く立ち直った」と思ってしまう。

浅井 外見ですぐ判断してしまいますからね。電気が早く回復したのはいいことなだけけど、三宮あたりで明かりがこうこうと灯っているのを見ると、すっかり元に戻ったのだなと思ってしまう。明かりは人を惑わすこともあります。

佐藤 生活の面では、仮設住宅に行っている人だけでなく、親戚や知り合いを頼って移って行った人たちが相当数になっている。家を再建しても二重ローンに悩んでいる人が多い。会社がつぶれたり、震災を機会にリストラの対象になって失業した人もたくさんいる。暮らしの復興はまだまだです。

浅井 政府は個人補償はしないとしているのですが、長期的に見て何らかの救済制度が必要になってくると思

ます。どんな制度が望ましいでしょうか。

佐藤 県や弁護士会などが提案している地震保険、そういうものが恒久的な制度として必要になってくると思います。神戸でこれだけの被災者が出たのですから、これが東京で起こったりすればはるかに悲惨なことになるでしょう。避難民が出るというより、大量の難民が出ることになります。ですから強制的な国民保険であるような基盤を作ることが必要だろうと思います。

浅井 日本人にとって生命と家とは切り離せないものですから、家をもっている人は必ず加入する共済制度というか、強制的な保険は必要かも知れません。自動車をもてば必ず保険に入らないといけない制度は既にありますが、地震に備えるそうした新しい保険制度の実現は可能でしょうか。

佐藤 難しい問題がいくつかありますが、少し形を変えてでも実現してもらいたい制度です。阪神大震災の被災者にさかのぼって適用されることが望ましいのですが、それがどうしてもネックになるというのなら、次の震災から適用するということになっても、新しいシステムを生み出すためには止む得ないのかも知れません。

浅井 一軒だけつぶれた災害にも適用するのか、そうではなく何軒以上壊れた地震に適用するのかという議論になると難しいところがありますね。

佐藤 雲仙や奥尻の災害では、一世帯当たり一千万円から千二百万円もの義援金が贈られました。阪神大震災の場合は最高でも四〇〇万円です。世界中から巨額のお金が寄せられたのですが、あまりにも災害の規模が大きかったのです。ですから、民間の善意を当てにするだけではなく、政府が全壊、全焼世帯には五百万円から八百万円くらいはを補償するべきだとは思いますが、それができないのであれば地震保険のような新しいシステムを作るべきです。それでもできないというのは、大震災から何を学んだのか、と怒りたくなります。

浅井 政府の阪神・淡路復興委員会の下河辺淳委員長は、一月号のこの対談で「地元の新聞、神戸新聞の役割に大いに期待している」と話されていました。

佐藤 一生懸命やっているつもりですが、困難な点もあります。国がもっと補助するべきだとキャンペーンをやり、読者は、その補助があたかも実現するものだと思いついてしまふ。実現しないと分かると、神戸新聞が責任を取ってくれ、と言ってくることもあります。神戸新聞には情報科学研究所というのがある、そこがいろいろな調査や提言をまとめたり、シンポジウムを行って多角的な研究や議論を展開しています。大学、医師会、弁護士会、ボランティア団体などいろんな団体をつなぎ合わせる役目を果たそうとしています。

浅井 キャンペーンを展開すると、あたかもそれは実現するものだと思いがちで、しつこくという悩みはよく分かります。オリンピックでも、新聞は金メダルは一個以上取れると書き立てている。読者もそれが当然だと思いついて、取れなかつたら新聞に腹を立てる。新聞が政府に対して地元のさまざまな要望をぶつけ、政府がそれは無理だとするとみんながっかりして、新聞が悪いと言いつくかもしれない。そうではなくて、地元と中央のギャップを新聞が冷静に分析する必要があるのではないですか。

★神戸発神戸着の報道を

佐藤 ご指摘のとおりです。市民にとって行政というのは市であり県なのです。市民が交渉するのは、市や県の職員と交渉するのですが、市や県は権限をほとんどもっていない。国の承認がないと何もできないのです。地方分権の必要がよく言われますが、いま現実には国の出先ではない構造なのです。被災者にはそこがなかなか見えない。わたしたちはその構造をこれまでもきっちり書いて



震災報道を話し合う佐藤さんと浅井さん

て来たつもりですが、これからも行政の構造が見える報道をし、住民の側に立つ行政になるように求めているかと思っています。

浅井 佐藤さんは見晴らしのいい新社屋に移ったと喜んでおられましたが、神戸からの視点だけでなく、日本全体を視野に入れ、神戸からの願いを大きなまないたに乗せて点検しながら報道されることを望みたいです。

佐藤 それはすごく大事なことです。特にそれは地方紙の役割だと思っています。神戸発神戸着、兵庫発兵庫着でなければなりません。被災者の要求はどんなことなのかを確認し、要求を実現させるためには行政のシステムはどのようなものになっているのかを知らなければなりません。中央の省庁に要求をぶつけるだけではなく、読者、県民に、正しい要求はどんなものかを議論してもらい、それを実現する手立てはどうであるかを知ってもらいたいと思います。

浅井 それに加えて、ほかの県がどう見ているかも大切です。「何で神戸ばかりなんだ」という声が上がっていますね。国のお金は全国民が払った税金です。

佐藤 それもよく分かるのですが、被災者はまだ感情的なところがあります。神戸のことを知らないで何を言うのだ、と反発します。

浅井 感情的なところがまだ強くあるのは仕方がないので、報道の姿勢としては広く見てほしいですね。

佐藤 難しいところです。数カ月間はみんなの気持ちが一致しまとまっていたんですが、その後だんだん要求が分極化してきています。仮設住宅にいる人、テント暮らしを続けている人、あるいはまちづくりを巡っても推進派、反対派

に分かれたりして、時間が経つにつれて立場が違ってくる要求も違ってくる。

浅井 新聞としては、いろんな声を載せてみんなで議論しましょう、というのが一般的なのですが、世論を導くということも考えられていいのではないですか。

佐藤 わたしは、この二年間はオビニオンリーダーになつてはいけないと言っています。多様な情報を、あれもこれも出していつて、その議論の中で一定の意見が形成されていったらそこで判断しようというのです。まずは情報を公開する、それが第一だと思っています。

浅井 大震災の取材を通じて記者としての考え方が変わったということもあるのではないのでしょうか。ことに若い記者にとつては二度とは得られない体験だったと思います。

佐藤 震災で得た新聞社の最大の財産はそれです。これまでは記者クラブ制度がしつかりあって、情報がコントロールされていた。それがなくなつて、全部足で歩いて取材しなければならなくなつた。現場が無数にある。避難所だけでも一カ所以上ある。目で見てきたこと、聞いたことを数人がつなぎあわせて記事にする。取材の原点に戻つたのです。いま、役所の情報提供も元に戻りましたが、記者は嚙呑みにするのではなく現場に行く癖がついています。神戸新聞の記者は地方に出ている記者も合わせると二百人くらいいます。その六割は平成になつて入社した記者なのですが、この状況の中でたまたまあげられた経験を基に、数年後にはすばらしい記者集団が育つてくると期待しています。

浅井 わたしの記者経験から言っても、講習会に参加しても役に立つことは覚えられない。やはり実戦のなかから何かをつかんでいくのです。それが生かされて、社屋だけでなく内容もすばらしい新聞を作られることを願っています。

（七月二十三日、神戸市教育会館で）